

SYÖNEN SYÖZYÖ



少年少女 世界文学全集



イギリス編 (3)

ガリバー旅行記

スウィフト 作・西村

クリスマス・カロル

ディケンズ 作・安藤一

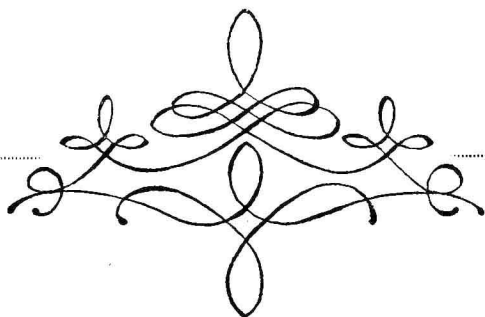
水の子

キングズレー 作・安藤一郎 訳

ほか 1 編

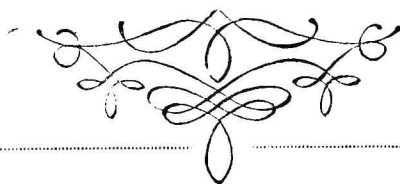


6



少年少女世界文学全集 6
イギリス編 第3巻

訳者代表	西 ^{にし}	村 ^{むら}	孝 ^{こう}	次 ^じ
発行者	野	間	省	一
印刷者	北	島	織	衛

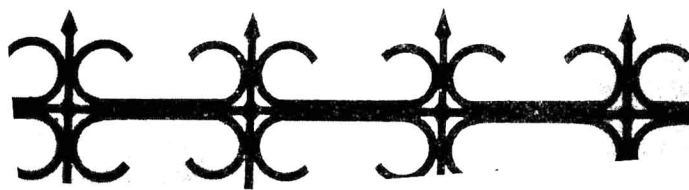


PRINTED IN JAPAN

目 次

少年 世界文学全集
少女

第 6 卷
イギリス編第 3 卷



ガリバー旅行記

ジョナサン・スウィフト作
西村孝次訳

第一部 リリパット（こびとの国）渡航記

- I わたしのおいたちと、家族のこと……とらえられて、首都へつれていかれる…… 11
- II リリパットの国王が、高官をしたがえて、つながれているわたしをたずねてくる……ポケットの中をしらべられ、剣とピストルをとりあげられる…… 24
- III たいへんきばつなことをして、国王や、宮中の人たちをおもしろがらせる……わたしは条件つきで自由の身になる…… 34
- IV リリパットの首都ミレンドーけんぶつと、国王の宮殿のこと……戦争のときはごほうこういたしますと、国王にもうしでる…… 43
- V わたしは、きばつな計略で敵の艦隊をぶんどる……わたしは、大かつやく

をして、ほかの御殿をすくう……………48

VI リリパット国の住民のこと……………この国でのわたしのくらしぶり……………57

VII わたしは、じぶんをむほん人にしようとする悪だくみのあることを知っ

て、ブレフスキューへにげだす——その国でのもてなしぶり……………65

VIII 思いがけない幸運から、ブレフスキューをはなれ、いろいろなくろうをし

て、ぶじイギリスに帰りつく……………74

第二部 プロブテインナッグ（巨人の国）渡航記

I 大暴風雨におそわれる……………住民のありさま……………82

II ひやくしょうのむすめのようにす——わたしは、みせものになって、

町から首都へつれていかれる——その旅の話……………96

III わたしは、宮中からお召しをうける……………おきさきのお気にいりの

こびとけんかをする……………104

IV 巨人きょじんの国のありさま……おもな寺院いんのようす……………117

V わたしの身みのうえにおこった、めずらしいできごと——わたしは、航海こうかいに
すばらしい手なみをしめす……………122

VI わたしは、いろいろとくふうして、王さまやおきさをよろこばす……

ヨーロッパのことを話はなしする——それについての王さまのご意見……………131

VII わたしの愛国心あいこくしん……この国の法律はうりつ、軍隊ぐんたい、政党せいとう……………140

第三部 ラピユタ（とび島しま）パルニバービ、ラグナグ、グラブダブ

ドリツプ（まほうつかいの島しま）と日本渡航記にっぽんとうこうき……………159

第四部 フウイヌム（うまの国）渡航記とうこうき……………177

クリスマス・カロール……………チャールズ・デイケンズ作
安藤一郎訳……………191

水の子

チャールズ・キングズレー作
安藤 一郎訳
285

第一節 マーレイの亡霊

193

第二節 第一の精霊

215

第三節 第二の精霊

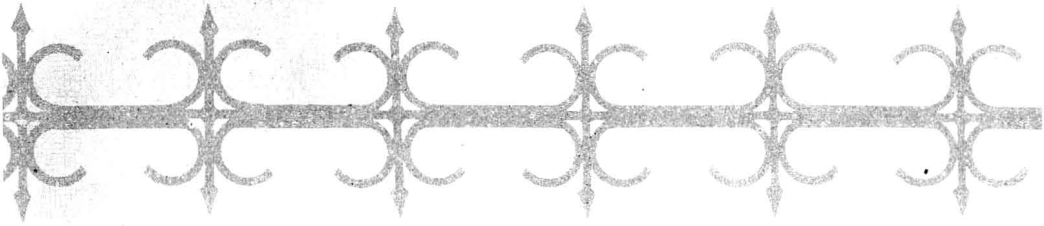
235

第四節 最後の精霊

259

第五節 ことのおわり

277



一 えんとつそうじのこぞう……………287

二 きれいでつめたい流れ……………300

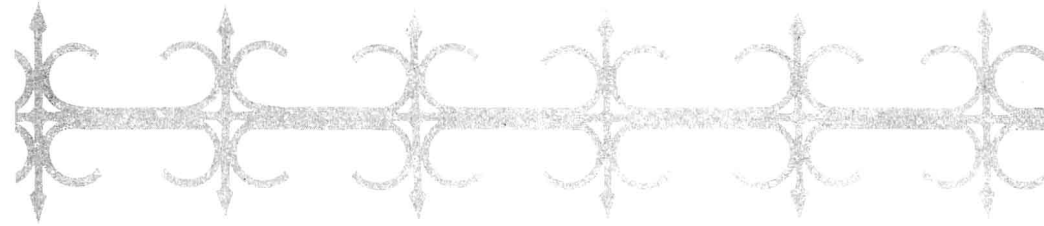
三 川の友だち……………307

四 ひろいひろい海へ……………318

五 水の子のなかま……………328

六 トムの勉強……………337

七 ひとり旅……………345



八 世界のはてのまたむこう 355

レスタ―先生の学校 369
メアリー・ラム作
西川正身訳

海のおじさま 372

とりかえ子 385

新しい母 411

解説 417
説 417
安藤孝次郎

読書指導 425
読書指導研究会
滑川道夫
柳内達雄

装
本
さしえ

池田仙三郎
松野一夫
油野誠一
太田大八
斎藤長三

ガリバー旅行記

ジョナサン・スウィフト作
西村孝次訳



ガリバー旅行記

について

みなさんは、この全集ぜんしゅうのなかで、デフォー
というイギリス人の書いた「ロビンソン漂流
記」という物語ものがたりを読よんだことでしょう。この
「ガリバー旅行記」というのも、いろいろ

点で、デフォーの作品さくひんとよくにているところがあります。そのことは、あとの
解説かいせつでも書いておきましたが、とにかく、この二つの小説しょうせつは、どちらも、みな
さんにとって、きっと、たのしい読みものとなるにちがいありません。

これは、世界的にゆめいな、すぐれた文学です。黒い目をした子どもも、
青い目をした子どもも、かつて一度は読んだことでしょうし、また、かならず
読んでおいてよい書物しよぶつなのです。わたし自身じしん、みなさんくらの年ごろに、読
みふけたものでした。そして、これを訳すために、もういっぺん読みかえし
てみて、いまさらのようにそのおもしろさ、その深ふかさにうたれたのでした。

わたしには、四人の子どもがいます。いちばん下の男の子は小学生ですが、
その子に読んで聞かせるようなつもりで、わたしはこの旅行記を訳しました。
愛読あいどくしてもらえば、ほんとうにうれしいことです。

(西村孝次)

さしえ・松野一夫

リリパット（こびとの国）渡航記

I

わたしのおいたちと、家族のこと——はじめて航海にでたわけ——難船して、命からがらリリパットの海岸におよぎつく——とらえられて、首都へつれていかれる。

わたしの父は、イギリスの中部にあるノッチンガムシャー州の小さな地主で、わたしは、五人兄弟の三ばんめでした。十四才のとき、ケンブリッジのエマニュエル学校に入学して、そこで三年間みっちり勉強しました。ところが、なにしろ、父のまづしい財産では、わたしの学費が、（といつても、ごくわずかなものだったのですが）あまりに大きな負担

だったので、そのころ、ロンドンでもゆうめいな医者さんの、ジェームズ・ベイツ先生の家に書生になつてすみこみ、そこで四年間、はたらきました。

ときどき父から送ってくるわずかなお金で、航海術や、そのほか、旅行にひつような数学などを勉強しました。それというのも、いつかは海外旅行にでるのが、わたしの運命なのだ、しじゅう考えていたからです。

ベイツ先生のところをでると、いったん故郷に帰り、父やジョンおじさん、そのほかのしんせきたちから、四十ポンドの現金と、年三十ポンドの留学費をだしてもらうやくそくで、こんどは南オランダのライデンへいきました。ここです、二年七カ月のあいだ、ながい航海にでたときに役だつ医学の勉強をしたのでした。

ライデンから帰るとまもなく、しんせつなベイツ先生のおせわで、エイブラハム・パネルという海軍大佐が船長をしている、「つばめ」号の船医になりました。この船で三年半をすごし、地中海の東海岸などへ二、三ど航海をしました。

もどつてくると、わたしは、いよいよロンドンにおちついて開業する決心をしました。さいわい、ベイツ先生も力に



なつてくださり、数人の患者までせわしてくれたのです。

わたしは、オールド・ジュリーというところに、ささやかな家をかりました。そうしたら、いっそ身をかためてはという話がでて、ニューゲイト町のくつした屋で、エドマンド・バートンという人のむすめ、メアリー・バートンと結婚することになりました。メアリーは、四百ポンドの持参金を持つ

て、およめにきました。

ところが、二年ばかりすると、ベイツ先生がなくなられ、もともと、たいした友だちもいなかったものですから、患者はだんだんへっていくばかりでした。それというのも、おなじ医者なかまの、ほとんどだれもがやっている、ずるがしこいまねが、わたしにはできなかったからです。

そこで、妻や、何人かの友だちとそうだんのうえ、もう一ど船に乗りこむ決心をしました。

それから六年のあいだ、つぎつぎに二つの船の船医をつとめ、東インド諸島や西インド諸島へ、何回も航海しました。それで、財産もいくらかふえたというわけです。

船にはたくさんのお金がそなえつけてあったので、ひまなときは、むかしや、いまの、えらい人の本を読みふけりました。また上陸すると、その土地土地の人情や風俗をしらべたり、ことばの勉強もしました。わたしは記憶力がよかったので、語学は、すぐじょうずになりました。

このさいごの航海が、あまり思わしくなかったので、海もいやになり、妻や子どもといっしょにくらしてみようかという気になりました。すまいも、オールド・ジュリーからフェ

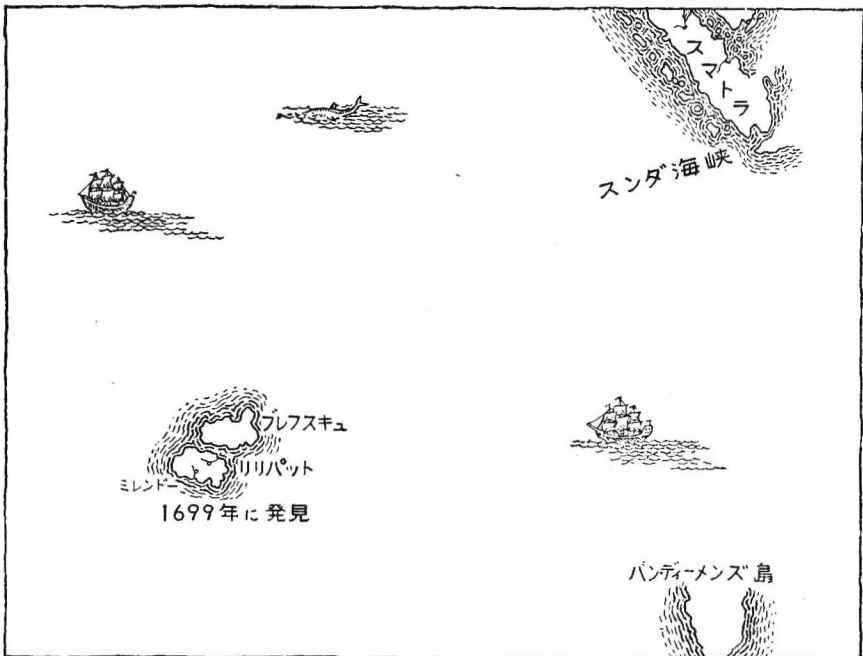
ター横町へ、そこからまた、まずしい人たちがすんでいるテムズ川をのぞむウォピング町へとうつて、ここで船乗りをあいてに開業したのですが、どうもうまくいきません。

いまに、いまにと、三年ばかりもそらだのみをつづけているうち、「かもしか」号の船長ウィリアム・ブリチャードさんから、南洋航路へかけてみないかという、話を持ちかけられました。わたしは、よろこんでしうだくしました。

一六九九年五月四日、船はイギリス西南部のプリストル港を出帆、はじめは、たいへんちようしのよい航海でした。

ところで、あちこちの海での冒険を、くだくだとのべたてて、みなさんをなやますのもどうかと思いますので、ただ、「かもしか」号が港をでて、東インドへとむかうとちゅう、ものすごいあらしにあつて、バン・ディーメンズ島の北西方までおし流されてしまった、とだけもうしあげておきましよう。

観測してみると、船は、ちょうど南緯三十度二分にいますとがわかりました。乗組員のうち十二人までが、はげしい労働と、そまつなためのために死んでしまい、のこりのもの、ひどく弱っていました。



十一月五日、といえ、このあたりでは夏のはじめで、とてもきりのふかい日でしたが、船から百五十メートルほどのところに、岩がつきでているのを、船員が見つめました。

なにしろ、ものすごい風なので、船は、あつというまに、岩にぶつつかると、こつぱみじんにくだけました。わたしを入れて六人の船員が、あれくるう海にボートをおろし、やつとの思いで、本船と大岩からはなれることができました。

わたしの計算で、十五キロもいだろうと思うころには、わたしたちは、くたくたにつかれ、もうこれいじょうは、どうにも動けなくなつてしまいました。そこで、運を天にまかせて、波のまにまにゆられていくうち、ボートは、半時間もたたないうちに、北からとつぜんおそつてきた風にあおられて、ひっくりかえつてしまったのです。

そののち、ボートのなかまや、岩の上にのがれた人たち、あるいは本船にのこつた人たちがどうなつたか、わたしにはわかりません。が、いづれも、ひとりのこらずおぼれ死んでしまったものと、思うよりほかはありませんでした。

さて、わたしは、泳ぎながら、風と潮の流れにおし流されていくばかりでした。ときどき足をのばしてみました、海

底にはとききません。ところが、もうだめだと思つたときに、ふと気がついてみると、せが立つてはありませんか。

あらしもだいぶおさまつてきましたし、そこはとおあさだったので、一キロ半ばかりあるいて、やつと岸にたどりついたのは、夜の八時ごろだつたでしょう。

そこから、また八キロばかり進んでいきましたが、家一人、人ひとり見あたりません。いや、そういうものは、目にはいらなかつたというのがほんとうでしょう。なにしろ、へとにつかれていましたし、それに、あつきはあつし、本船をはなれるときに飲んだすこしばかりのブランドーもきいてきて、ねむくてねむくてたまらなくなりました。そこで、わたしは、やわらかい草の上に横になると、うまれてはじめてといつていくくらい、ぐっすりねこんでしまいました。

目がさめると、ちょうど夜あけでしたから、かれこれ九時間ぐらひはねむつたでしょう。か。おきようとする、どうしたわけか、からだは動きません。それもそのはず、わたしは、あおむけにねていたのですが、手も足も、ながいかみの毛も、地面にしっかりとしばりつけられていたからです。そればかりか、胴体にも、やはり、わきの下から、ふとももに